

六等星

校 長 武井 正明

火曜は七夕、久々に晴れた七夕、妻と夜空を見上げた。

夜空を見上げると思い出す。前任の加茂市立須田中学校の生徒玄関、冬の下校時、数々の星たちを生徒たちと観たことを。

大学時代からの同期友人であり同僚だった理科の澤栗先生（ぐりさん）は、天体望遠鏡を自宅から持参して、折に触れて子どもたちと天体観測をしていた。

教科書で見るのと実際に観るとでは感動が全然違う!! 木星のぐるぐる動く縞々の緑色、土星の環が鮮明に見える。「わあっ、見える見える」と歓声を上げながら子どもたちと一緒にうっとり宇宙に思いを馳せた、ロマンチックな光景が忘れられない。

地球から約1億km離れた位置にある小惑星「トリフネ」が、観測に成功したというニュースも先日飛び込んできた。

ふと私は、ブラックジャックの「六等星」という話を思い出した。

ブラックジャックは、助手のピノコとふたりで夜空を見上げている。

「一等星と六等星では明るさが100倍も違う。しかし、実際は一等星よりももっと何十倍も大きな星かもしれないんだ」

「世の中には六等星みたいに映えない人間がいくらでもいる」

いつも憎まれ役になってしまうブラックジャックを慕うピノコは、夜空を見上げながら「ね 先生 あのずーっとはなえて ひといぼっちで光ってゆのが 先生よのね」

「ねーそいれ あの先生の横れくっついて ちっちゃーく光ってゆのは ピノコなのよのね」

互いの心に「傷」を持ちながらも、誰よりも互いを思い、労わり合いながら夜空を見上げるふたり。わたしだけは誰よりもあなたのことを理解している。ずっと一緒…。手塚治虫が描く人間愛に溢れた世界観、好きだなあ…。

人はとにかく一等星になりたいものだ。

しかし、最も輝くからといってそれがいったい何なのだろうと、この歳になると思う。

自分の両親は、世間でいえば目立たない六等星だったかもしれない。しかし私にとって掛け替えのない一等星だった。

それはみんなも同じ。

みなさんの親御さんにとって、あなたは何物にも代え難い、待ちに待った一等星なのです。

だから君は自分が光っていることに気付かないだけ。あなたを大切にしている人には、はっきり見えているのです。

